
Executioner 処刑人

サラブレッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Executioner 処刑人

【Nコード】

N1020B

【作者名】

サラブレッド

【あらすじ】

有名な死刑執行人の父が何者かに殺され、犯人の処刑人になることを決意する

悲劇と決意（前書き）

結構考えました。まあまあオリジナルなストーリーになっていると思
います。

悲劇と決意

月が真上に昇った頃、辺りを照らす唯一の明かりは、たいまつと月の薄い明かりだけだった。国王の城のフカフカのベッドに、16才のジオルノ・ツエペリは、夜の静けさと共に寝静まっていた。

ふと、目が開く。寒気がした。窓は開いていない。しかも、まだ暖炉の火は消えていない。嫌な予感がする。何かが違う。ジオルノは毛布をはぐり、窓から外の様子をうかがった。この場所は、4階ほどの高さで、下はレンガ等できれいに整備された塀があった。

(…ん。今何か動くのが見えた)

ジオルノは動く物の姿を見てすぐに分かった。

「父上」

背が高く、がっちりとした体型で、目は威圧感があり、あごの筋肉はしっかりと付いていて、歯を食いしばると、いまにも襲ってきそうな父だ。

ジオルノは迷わず部屋を出て螺旋階段を素早く降りた。下に降りるほど寒くなっていく。ジオルノは塀の下を通り過ぎると、父が血まみれで倒れていた。

「父上」

必死にその体を抱きかかえる。

「誰かいないかー。」

「もうよい。」

そう長くはもたん。

私は、20歳の頃から、死刑執行人をやってきた。しかし、お前も聞いておろう。私は、処刑を失敗したのだ。ある日、罪人を斬首刑にするべく、処刑刀を使おうとすると折れていた。結局、部下の剣

を借りたが、気が付いたときには、刃が錆びていた。その罪人は断末魔をあげて絶命した。敗因は私なのだよ。」

「しかし、これは誰かがしくんだんだ。」「息子よ、何もかも手遅れだ。ぐっ」

父の顔が青ざめている。

「さい…に、私の…もうひとつの、処刑刀がしよさいに…る。だいに、じに…よ」

うつすらと目を閉じる。ジヨルノの体から滑り落ちた。

ぐっ、ひっく、クソオ

あまり涙は出なかった。それとは別に、体中の血が騒ぎだす。

「コロシテヤル。必ず犯人を探し出して、死刑シテヤル。俺は貴様らの処刑人になってやる。そして昼、父の葬式が城内で行われた。

神使と呼ばれる職種の老人が台に立つ。黒くて長いローブを着ていて背中には細身の剣の刺繍が施されていた。神使が、

「神アルテマの………」

これにより、死刑執行人、グレゴリオ・ツェペリがやすらかに逝くことを願う」

太陽が照らし出す光は、悲しみに包まれた人々をやわらげている気がした。

ジヨルノは、静かにその場を離れようとした時、先ほどの神使が近ずいてきた。

「ちよつと失礼、ジヨルノ・ツェペリ君だね。」

「はい…」

「私の名はブランドー言う。少し聞いてもよろしいかな。」

「どうぞ…」

「これからどうするつもりかね。」

「父を殺した犯人を追います。」

「やはりそうか。ハア、今の君には何を言っても無駄なようだ。」

何が言いたいんだ。

ブランドーは一息ついて続けた。

「もし困ったことがあったら私を訪ねなさい。城から北へ真っ直ぐ進めば小屋がある。」

「ありがとうございます。」

ジヨルノはもう犯人を追うことを考えていた。

悲劇と決意（後書き）

第2話を乞うご期待

2 話目 大きな影（前書き）

主人公が村長の名前を間違えて聞いてます。本当はドドリオ村長ですか？です。

2 話目 大きな影

あの事件から2年後、ジヨルノは、手掛かりを探すべく、父の友人を訪ねようとしていた。

城から馬で3日はかかっただろう。おかげで、ようやく目指す村が見えてきた。門は無いが、周りには、人より背が高い木の板が、村を囲っていた。

「おい、その人。村に入るなら、馬から降りてくれるかー」
上を見ると、痩せ型の男が、物見櫓から身を乗り出して、両手を輪にして口に当てていた。ジヨルノは頷いて、馬から降りた。村の中に入ると、一人の子どもと目が合った。「人を探しているんだ。ドドリオって言う人なんだけど……」

少し間をおいて、返事が帰ってきた。

「その人は村長だよ。この道を真っ直ぐ行くと、すぐに見つかるよ」「そうか。ありがとう」

手を振って別れた。

ジヨルノは村長の家の前に着いた。他家と造りは一緒だが、大きくな家だった。

「お前は誰だ？」

家の入口から出て来た男が言った。

「ジヨルノ・ツエペリと申します。あの、グレゴリオ村長ですか？」

「ああ、そうだ。」

「父グレゴリオの友人だと聞いて訪ねたのですが」

「おお、お前が息子か。災難だったな。話は聞いたよ」

「ええ、しかしあなたは、何故葬式に出席しなかったのですか？」

「わしは、いろいろな情報を知っている。あまり外に出歩けないんだ。さあ、家の中で話そう。すぐに料理の仕度をさせよう。それと、今夜はここに泊まるかい」

軽く会釈をして中に入った。

ジヨルノの服装は、全身黒色で統一されていて、体に密着している。保温、保湿、動きやすさを追及した戦闘着だ。ベルトには、ダガーが2本、両腰に納まっていて、背中には、父の形見である処刑刀が左肩から右足にかけてあった。

テーブルにお互い座りドドリオ村長が口を開いた。

「その背中の剣、よかつたら見せてくれないか？」ジヨルノは黙って剣を渡す。ドドリオは鞘から剣を抜いて……

「ほう、直刃か。……造形に遊びもない。人を切りやすくするためか？」

(直刃とは、刃についている紋様が破線でなく直線のもの)

「ええ、これが処刑刀です」

「一つ注意しておこう。これは、完全に扱えるようになるまで、あまり抜かないほうがいいぞ」

「はい」

「よし、本題に入ろう。父親を暗殺した犯人までは分からないが、これは反逆や革命ではない。何か、大きな力がそうなるように仕向けた可能性がある。」

「まさか、国王が関係しているとも？」

「おそろくな、しかし、確信はない」

そのとき、1人の女性が料理を持ってきた。

「わしの妻だ。さあ、腹一杯食べて寝ろ」

食後、ジヨルノは体の汚れを洗い流し、体が麻痺でもしたかのようになり、布団に入ると動かなくなった。

2 話目 大きな影（後書き）

3 話目 へつご期待

3話目 謎の光（前書き）

今回はいよいよ戦闘場面です。未熟者ですが楽しんで下さい。

3 話目 謎の光

真暗な夜、月の明かりに照らされて、黒色で深いフードのローブを着た男が村にやって来た。

「ジヨルノ・ツエペリー？いるかー？あれ、寝てんのかな？よし、じゃあ1軒ずつ探すか。」

男は、背中にある大剣を抜いた。そして、目の前の家に向かって、大剣を振り下ろした。すると、刀身から禍々しい光が放たれた。

「ん？さつきから外が騒がしいな」

「やめろー。やめてくれー」

(まさかっ……)ジヨルノは急いで剣を装備し、外に出た。暗闇のなかで、禍々しい光が見えた。すると、家が悲鳴をあげたように壊れていく。段々目が慣れてくると、光を出していた正体が、男であることが分かった。

「貴様あ、誰の差し金のもんだあ」

ドドリオ村長が長い槍を持って、5人の村人と一緒に、その男を取り囲んでいた。

「俺の名はクルーシュって言うんだけどよお、今人探してんの。ジヨルノ・ツエペリーとか言う奴。知ってんだろ？」

「村長、こいつの仕業ですか？」

丁度ジヨルノが走って来た。ドドリオ(村長)がこっちに来るなど言う瞬間。クルーシュがこちらに向かってきた。村人が反応して、襲いかかろうと剣を振るうが、虚しく空を斬った。大剣を扱っているにもかかわらず、軽やかな動きに翻弄され、1人、また2人の腕が斬り落とされ、とうとう全員が両腕を斬られてしまった。

「ああーウデがあ」「ひいひい……」

村人が悲鳴をあげる。

「雑魚に用はねえ、残りは村長とジヨルノかあ。次はどちらかな？」

ククッ」

「ジヨルノ、お前は逃げる。今の力じゃあ奴には勝てん。うおおー」
ドドリオは、槍を右上から左下に振り下ろした。すると、クルーシユはひらりと避けて、豪快に斬り返した。

血が吹き出す。ドドリオは、声をあげる間もなく絶命した。

「格が違うんだよ。俺はクルーシユ。お前を殺すように命令された。もし戦う気がないんなら……」

「うおおお」

ジヨルノはダガーを両腰から抜き、右上から振り下ろした。クルーシユは剣で弾いた。

「貴様あ、よくも。」

「おうおう、威勢がいいねえ。でもよお、相手を選んで言えよ？」
すると、紫色の煙のような光が、クルーシユの体中から吹き出すように出て来た。

「なんだ？それは……」

「まあ、危険な物とでも言っとくかな」

クルーシユが右下から斬り上げる。ジヨルノは間一髪、両腕のダガーで受け止めた。

「こいつ、早い」

互いに激しく競り合う。クルーシユは余裕の表情で……

「この大剣とダガーじゃ、リーチャパワーが全然違う。はつきり言つて、武器の選択ミスだ。フン」

クルーシユの剣に、紫色の光が集まる。同時に、ジヨルノのダガーが2本とも

「キン」

と、甲高い音を出して、折れてしまった。

「そんな……」

ジヨルノの胸から血が吹き出した。思わず膝を突いた。
「後ろの剣を使えばよかったなあ。だが、トドメだあ」

とつさにジオルノは、背中 of 処刑刀を掴んで抜いた。剣から赤い光が迸る。紫と赤がぶつかり、赤の光が紫の光を弾いた。

「これは……クルーシユ。どうやらお前と同じ、いやそれ以上の力が発現したようだな」

クルーシユはよろけながら言った。

「馬鹿な……処刑刀が（呪）を引き出したただとあ？」

ジオルノはクルーシユの首に剣を向けて言った。

「話してもらおうか。」

お前は誰に命令された？シユ（呪）って何だ？さつき口をすべらせた、みたいな言い方をしたよな？」

「ハンツ。テメエに言う事なんざ何もねえぜ。それに……まだ負けてねえ！！」

クルーシユがジオルノの剣をはらい、右上から斬り下げてきた。

「愚かだな。乱れすぎだ」

ジオルノは、クルーシユから見て、右側に体を一回転させながら、下から上に斬り上げ、クルーシユの右腕が切断された。

「グッ、がああ」

左腕で斬られた右腕を押さえながら唸った。

「村人と同じようにしてやるよ。でも、最後は斬首刑だ。」

そう言つて、容赦なく左腕を斬り落とした。クルーシユは気を失つて、うつぶせに倒れた。血は生々しく体の周りに広がる。

「やすらかに眠れ……」

ジオルノは剣を振り下ろした……

3 話目 謎の光（後書き）

4 話目 乞つご期待

4話目 出会い(前書き)

今回は女性に初挑戦してみました。お楽しみ下さい。

4話目 出会い

ジヨルノは、殺された村人と、クルーシユの遺体を、生き残った人達と一緒に墓を作った。

「ジヨルノさん、私達のことは心配なさらずに、行ってもよろしいですよ。」

ドドリオの妻が言った。

「しかし、俺がこの村に来たせいで……」

ドドリオの妻は首を振り、

「私達の村では、誰かのせいにしたり、恩義せがましいことはしないようにしています……たとえば、夫が殺されたとしても……」

「……強いですね」ジヨルノは心が痛んだ。父の復讐を思い続けてきて、憤りを感じたこともあった。（しかし、憎しみがなければ犯人を追う目的が……）ドドリオの妻はなだめるような言い方で、

「あなたの気持ちは分かります。父親を暗殺されて、犯人を恨む気持ちが。しかし、それは間違っています」

「……え？」

ジヨルノは突然の言葉に、あっけにとられた。

「あなたは感じたことがありますか？復讐に対する憤りが！」
「それは……あります。しかし、憎しみがなければ、犯人を追う目的がなくなります」

「あなたの心は病んでいます。このままでは自身の首を締めることになるでしょう。……誰か頼りになる人はいませんか？」

「……えっと、あ！困ったときは訪ねると言った、ブランドーという神使がいました」

「ブランドー様に？あの方がそうおっしゃったのですか？」

「ええ、知っているのですか？」
「もちろん。あの方なら何か良いことを教えてもらえるでしょう」

「そうですか。ではブランドーの所へ行くことにします」

「道中お気を付けて」

ジヨルノは馬小屋にいる愛馬バレットに乗って、村をあとにした。

山を下り、草原でバレットを走らせていると、日が暮れてきた。

（もう夜か、野宿をする場所を探さないと）

ジヨルノは草原を抜け、山に入った。丁度岩で出来た洞穴があり、数人分入る広さがあったので、バレットを中に入れた。そして、薪を集め、水を組み、洞穴に戻った。バレットは疲れているのか、足を折り曲げ、うつとりとした表情でこちらを見ていた。しゃがんでバレットの体をなでながら、

「いつもありがとうな、これからもよろしくな」

バレットは頷いたように、頭をジヨルノの胸の所へ当ててきた。

ジヨルノは村で貰った肉と野菜をすりつぶし、肉野菜団子を作った。それを沸かした湯に入れた。しばらくして、肉野菜団子が湯の表面に浮いてきた。（よし、出来た。）

食べようとしたとき、外で何かがこちらに向かって来る音が聞こえた。とっさにジヨルノは剣を抜く。何かが洞穴の中に入って来た。まだ暗くて分からない。

「そこで止まれ！誰だ！」

すると、声が聞こえた。

「あのー、近くを通ったら良い匂いがして……そのまあ、よければ食べ物わけて下さい」

（女？）聞いていて嫌にならなくて、ハキハキとした口調だった。「……分かりました。しかし、まだ信用してませんので、ゆつくりと明かりの方に歩いて来て下さい」

「はい」

女性が明かりに近付くにつれ、どんな顔で、どんな格好をしているのかが分かった。

さらっとして桃のような髪が、肩に腰を掛けていた。透き通るような白い肌、きれいに整った目鼻は明かりに照らされて、より美しくなる。上半身は白を主とした、長袖の服だった。手は黒の手袋をしていて、ワニのような鱗状の小手があり、腰には同じ素材の腰当てがあった。下半身は赤の動きやすそうな長裾だった。

ジオルノは、あまりの美しさに口を開けたままで、呆然としていた。気が付くと女性はほんの目と鼻の先まで来ていた。

「大丈夫？どうかした？」

ジオルノははっとして後ろに下がった。

「だ、大丈夫です！それより、あなたは武闘家ですか？」

「うん。で……食べていいの？」

「……どうぞ。粗末な物ですけど」

女性は笑顔になって、

「そんなことないよ、栄養がありそうで、お腹いっぱいになりそう。

あ、私ドミニクって言うの。よろしくね？」

「俺はジオルノ。よろしく」

復讐と言う名の闇に染まっていたジオルノに、小さな光が表れた。

4 話目 出会い（後書き）

5 話目 気づきと期待

5 話目 呪（前書き）

今回は文章作りに困りました。やっと出来上がってホットしてま
つす。

5 話目 呪

日が昇り始める頃、ジヨルノは目を開いた。洞穴の中を見ると、バレットとドミニクがいない。外に出てみると、ドミニクがバレットの体を洗っていた。

「おはよう。ジヨルノ」

陽光が朝靄を通り抜けて、ドミニクに降り注ぐ。バレットの体を洗って跳ね返った水は、彼女が動くたびに宝石のように光だす。

「バレットが慣っている」

「もう、挨拶は大切なことよ！」

ドミニクの目が険しくなったので、慌てて返事した。「ああ、すみません。おはようございます」

「……年いくつ？」

「18です」

「私と一緒にね！じゃあ敬語は使わなくていいと思うけど？」

「あ……うん、おはようドミニク」

ドミニクは笑顔になり、ジヨルノに質問した。

「これから何処に行くの？」

「ブランドーって言う神使に用があって」

「へえ。剣を持っているってことは、人を斬ったりする？」

「うん。父が何者かに殺されて、手掛かりを探してるんだ」「復讐
つてことね。しかも相当恨んでるんだ！」

「うん。いつか必ず見付けて、この処刑刀で首を斬り落としたいと思ってる」

「憎しみが強ければ強い程、呪シユの力は増すけど、いつか呪に喰われるわよ！」

「呪？ああ、俺の剣が光ったこと？」

「うん。ねえ、私も一緒に行つていい？」

「え！でも危険だから……」

「でも、今のジオルノより私の方が強いんだけどなあ」

「……剣と素手でも？」「うん。じゃあ試しに練習試合しよ！剣を使っでいいよ」

「でも、女の子は」

ドミニクは言葉を遮った。

「大丈夫！」

「分かった……」

ジオルノは剣を取って構えた。すると、この前の赤い光が蘇ったように溢れ出た。

「すごい光だね。」

ドミニクはジオルノと違って体中から緑の光が溢れ出た。

「じゃあ、始め！」

最初に、ドミニクが一気に間合いを詰めて来た。そして素早く飛び蹴りを繰り出した。ギリギリでジオルノは剣で受け止め、わざと剣の腹で反撃した。しかし、あっさりと空を切り、隙が出た脇腹にドミニクが拳を入れた。

「ぐっ！！早い……」

剣の金属音がして、ジオルノは地面に倒れ込んだ。

小鳥のさえずりが

「起きて」

と言っているようだった。…何か冷たい物が額に乗った。目を開くとドミニクが心配そうな顔で見ていた。

「ふうー、良かった。ごめんね。ちょっと強くしすぎて……」

ジオルノは起き上がるうとしたが、体が動かなかった。

「あ、ダメダメ。呪を使って殴ったからもう少し休んだほうがいいよ！」

そう言いながらドミニクはジオルノの左手を両腕で掴んだ。(……温かい)

ドミニクの手は溶けるように柔らかく、優しい手だった。

「ねえ、呪の使い方を教えてくれないか？」

「でも、そのままならいつか……」

『分かってる！変えるよ。時間がかかっても』

「……約束よ！じゃあまず呪って言うのは、心の負の部分から作られるの。これは誰にもあるものだけど、私達みたいに能力として使える人間は少ないわ。しかも能力の発現は唐突で、あまり知られていないから、よく解明されてないの」

「俺はこの処刑刀が呪を発現した」

「やっぱりね。さつきジヨルノは呪を使っただけど、ほとんど剣から力が出ていたわ。この発現の仕方はちょっと特殊で、私にも分からない。でも、ブランドー師匠なら分かるかも」

「えっ？師匠って？」

「黙っててごめんね！実は私の師匠で、ジヨルノを連れて来るように言われたの！」

「でも、ブランドーのいる場所は知っているけど……」

「3日前、師匠の家が襲撃されたの。相手は見たこともない部隊で、調べてみると、国王直属の騎士団だった。」

『な！そんな部隊は存在しない！』

「うん。もしかしたらジヨルノが追っている犯人かもしれないわ」

「……すぐに出発だ。俺をブランドーの所へ案内してくれ！」

「うん。でもその体が回復してからね。」

一方。白く気高き城は、闇によって、形が変わっているかのように染まっていた。

5 話目 呪（後書き）

6 話目 乞（ご）期待

新しい処刑人（前書き）

かなり久々の投稿です。できればコメントお願いします。

新しい処刑人

バレットは、息を切らさず土を蹴る。前にドミニク、そして後ろにジオルノが乗って手綱を持っている。前から過ぎ去る風に、ドミニクの髪から甘くていい香りが乗ってくる。ジオルノは少し顔を赤らめながら、先を急いだ。

「ねえ、あんな所に城の兵がいるわ！30人はいる……」

人や馬の通り道を、隙間がない程に詰めて歩いている。ジオルノ達は、兵達と同じ山道を通っていた。（このままではいずれ対峙してしまう。遠回りをしようにも、この山道で、斜面が急な場所では危険だ）

ジオルノは手綱を引き、バレットを止めた。

「ドミニク、俺が今から奴等に一人でここまで来たように思わせ、話をしてくる。もし戦闘が始まったら一緒に戦ってくれないか？」

「それ女の子に言う言葉？まあ一般人じゃあないけど……」

「そうじゃないよ。俺は、君を頼りにしているんだ。」するとドミニクの頬は少し赤くなり、黙って頷いた。

「じゃあ行つて来る！」

ジオルノはバレットを進めさせた。

しばらくして、

『その者、止まれい！』

先頭の兵が言った。どうやらこの隊の長のようだ。全員銀色の鎧は、まるで岩を装備しているかのようだった。

「私の名はジオルノ・ツエペリだ。処刑人である……」

『皆まで言わずとも分かるさ。貴様を父親殺しの罪で、この場を持つて処刑する。』

「な！何を言っている。私ではない」

『お前しかいないんだよ！あの日現場にいたのは貴様だけ、そして貴様がいない間に部屋を調べたところ、凶器のナイフが見つかった』

「違う！誰かが俺を羽目ようとしているんだ。そもそも国王はどうした？命令を下したのか？」

兵は微笑して言った。「もちろん。これが証明文書だ。あの方は大変お怒りになっていらっしやる。さあ剣を抜け！我ら国王特殊部隊、ノーマ隊。参る！」

兵達が一斉に剣を抜いた。ジヨルノは素早くバレットから飛び降り、来た道に戻るように促した。そして処刑刀を抜いた。呪が発動し、赤い光が溢れ出た。

兵が走りながら距離を詰めて来た。30人分の金属音が重なって迫って来る。

「はああ……」

ジヨルノは剣を肩に掛けるように上げ、一番早く来た兵を斬りおろした。呪の力は鎧や盾を無視し、空を斬っているような切れ味だった。

(10人。後20！)

そのとき、後ろから隊長が斬りかかってきていて、反応が出来なかった。

『てえやあ！』

「くっ……」

しかし、ジヨルノに斬りかかる寸前に、ドミニクが入って、拳で剣の腹を殴り、弾き返した。

『早い……な何だ貴様は』

「ジヨルノの恋人よ！なーんちゃって」

ドミニクはよろけ気味の隊長の腹を思い切り殴った。そして声をあげる暇もなく倒れ込んだ。

「ヒイイ！こいつら強すぎる！撤退だ。」兵達が手負いの仲間を見捨てて逃げようとしたとき、

「させるかっ」

ジヨルノが剣で地面を強く斬り上げ、弾け飛んだ無数の石を兵達に

命中させた。

「すごい！まとめて命中させるなんて」

兵達は気を失っていたが、1人は意識があり、石が当たった場所を触って呻いていた。そして、ジヨルノはその兵に剣を突き立てたまま近付き、質問した。

「無駄な抵抗はするなよ！城はどうなっている？それと貴様らのよ
うな部隊は無かったはずだ」

兵は溜め息混じりに答えた

「……城には新しく処刑人選ばれたお方がいる！そしてお前達ツ
エペリ家の地位は剥奪された」

「そんな！……誰だ？その処刑人は」

ジヨルノは剣を鞘に納めた。相手は抵抗する気力が無かったからだ。
「新しい死刑執行人の名は、ルシファー・アジ・ダハーカ様だ。」

「ダハーカ？何処かで聞いたような……」 「まああのお方より強
い人間はいないだろうな！お前達がどう足掻こうが……」

ジヨルノは兵の顔を思い切り殴った。兵は小さく呻いて気絶した。

「ドミニク、先を急ごう」

「うん。バレットを連れくる」

ドミニクが走っていった後、妙な胸騒ぎがした。

一方その頃。ジヨルノの母国であるバロン国では、処刑人ルシフ
アの就任式典が行われていた。そして、ルシファーが民を前に、少
し高い台に乗り、演説した。「みなさんこんにちは。御存じでしょ
うが、私は新しい死刑執行人、処刑人です。罪を犯した者を裁き、
国の平和を維持します。ですが、私とて人を殺めることはしたくは
ありません。しかし次々と悪事をはたらく者が増え、民が恐れるよ
うなことを見逃すようなことは出来ません。近々戦をします。相手
は我が国のレジスタンスです。しかし、勝機は十分にあります。ご
安心下さい！」 拍手がなった。しかし、中にはどよめきの声も聞

こえた。

ルシファアの髪は、夜のように黒く、さらりとした長い髪だった。人を見透かすような不思議な目で、表情を読み取るには無理があった。そして、きれいに整った顔は、通り過ぎる女性を振り返らせた。

式が終わり、城内をルシファアが一人で歩いていると、前方から二人の男がやって来た。一人は城の警備兵で、もう一人は、この建物には到底似つかない中途半端な服装だった。

「ルシファア様、情報新聞の記者が参りました」
兵はセリフを棒読みしたかのようだ。

「初めまして！私はルールーと申します。あなたのことで取材をさせて頂きたいのですが」

「……ええ、いいでしょう」
ルールーはその言葉を待っていたかのようだ。

「ありがとうございます。では、女性が気になっている服装ですが、国王から授かったものですか？」ルシファアの服は貴族が着る服を動きやすくしたもので、いろいろな刺繍や装飾が施されていて鮮やかだった。

「ええ、そうです」

「では左腕にはめている腕輪はあなたのですか？」

その腕輪は血のように赤く、ぴったりと付いていた。文字を彫った後があつたのだが、色を塗っていなかったので、何を意味するのかが分からなかった。

「これは私の物です。血の色を表現していて、人を殺める意味の深さを忘れないようにするためです」

「なるほど、それでは……」

そのとき、ルールーは自然と目が会った。そして、真っ黒な瞳がこちらの目をしっかりと捕らえていた。

「もっ……いいですよね！」

ルーラーは目線をずらすことが出来なかった。まるで石像になったかのように、指一つ動かすことが出来なかった。

「それでは、失礼します」

ルシファーは足早にその場を去った。「……おい、あんた！ルシファー様にお礼の挨拶をしないなんて失礼じゃないか！聞いているのか？」

兵がルーラーの体を揺さぶると、再び動くことができるようになった。

『っは！はあ、はあ、息が詰まるかと思った！でも、感覚は鮮明で研ぎ澄まされていて……（ブツブツ）』

それを聞いた兵が顔をしかめ、

「何を言っているんだ！まあ、無理もない。ああ言う地位の高い方に会うのは初めてだろう。えらく緊張したものだな。さあ、そろそろお引き取り願おうか！私も早く持ち場に戻らなくては」

そう言ってルーラーの肩を押しながら出口に連れて行った。

新しい処刑人（後書き）

7 話目乞つご期待

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1020b/>

Executioner 処刑人

2011年1月18日04時24分発行